

# メディア史教育における 博物館展示の活用を考える

A study of utilization possibility of museum displays in media history education

Mitsutoshi Shimomura

霜 村 光 寿

図書館学課程非常勤講師

## 抄録：

図書館資料の基礎である図書は、広義にはメディアそのものを指し、図書史はメディア史であるといえる。あるできごとが起こる過程を検証するのが歴史学であるが、各種メディアはそれら歴史を記述してきたものであり、それらメディアそのものを視覚的に認識することは、メディアの歴史を私たちが同時代的に感じとる一助となりうる。本稿は、図書・図書館史の授業における博物館資料の活用可能性を考察するものである。

## Abstract：

Books are foundation of library materials, which represent media itself in a broad sense. Thus it is considered that history of books is the media history. Historical science is to verify the history of specific incidents, and media is the description of those history. Recognizing these media visually may be contributory for us to comprehend media history contemporarily. Here we describe the utilization possibility of museum materials in lectures on history of books/libraries.

キーワード：図書・図書館史、メディア史、歴史学、博物館資料、博物館展示

Key Words：History of books/libraries, Media history, Historical science, Museum materials, Museum display

## はじめに—図書館学における歴史学的アプローチ—

図書館司書資格取得のためのカリキュラムの中には、「図書・図書館史」という科目が設けら

れている。この科目は選択科目のため、学生によっては履修しないという選択をする場合も当然あり得る。筆者は本学図書館学課程において「図書・図書館史」を担当しているが、筆者自身のもともとの専門は歴史学（日本近現代政治史）である。歴史学専攻の身としては「図書・図書館史」も必修科目として欲しいところである<sup>1</sup>。

この認識の差が生じる要因や「歴史とは何か」という問題については本論中で触れるが、端的に言えば学問としての歴史学は、あるできごとが起こった過程を検証するものであるといえる。図書史・図書館史とは、図書・図書館という研究対象へ歴史学的アプローチを行うものである。図書館は図書館資料なくして存在し得ない。図書館資料の中心を占める図書は、一般的なイメージではいわゆる本である。しかしながら、周知の通り図書形態以前にも「図書」に相当するものは存在しており、また近年ではデジタルメディアの急速な普及により、図書館資料としてもそれらデジタルメディアもはや無視できない存在となった。これらの状況を鑑みると、図書とは広義にはメディアそのものを指すといえよう<sup>2</sup>。メディア史における広義の図書を知るにあたって、そうしたメディアの現物を視覚等で認識することは、メディアの歴史を私たちが同時代的に感じとる一助になると考えられる。

後述するとおり、歴史学習はその性格上とかくテキスト学習に偏りがちな部分がある。しかしながら、それだけでは歴史の本質に迫ることは難しい。歴史学習においても、テキスト以外の情報から学び得ることは少なくなく、図書史では特にメディアの現物に触れることは大きな意義がある。それら現物を所有している博物館・美術館は少なくなく、大学の授業でも大いに活用されるべきと考える。そこで本稿では、筆者が担当した図書・図書館史科目において、博物館資料が活用できるのではないかと考えた部分を述べ、博物館資料およびその展示の活用可能性を考察することとしたい。

## 1. 本学における筆者の「図書・図書館史」授業計画

詳細はシラバスをご参照いただきたいが<sup>3</sup>、まず本学における筆者の「図書・図書館史」の授業計画について簡単に触れておこう。学部・短期大学部で若干の差異はあるものの、基本的なスタンスは変わらない。筆者の授業では、現在われわれが利用者として享受している図書館サービスが自明のものではなく、多くの図書館人の試行錯誤の上に成り立っているものであることを踏まえ、メディアと図書館の歴史を概観することで歴史的思考を身につけ、図書館の将来像を考える一助とすることを目的としている。授業の方式は通常講義形式であるが、レポート報告など若干の演習を取り入れている。授業の内容は図書・図書館通史としているが、図書館司書養成課程の基礎となっている図書館法における図書館が公共図書館を指しており、その公共図書館の成立が近代であることと、筆者の専門が日本近現代史であることから、一般的な図書・図書館通史よりは近現代の時間が全体の半分ほど（半期全15回中6～7回）となるように計画した。

教科書には、主に小黒浩司編著『JLA 図書館情報学テキストシリーズⅢ -11 図書・図書館史』（日本図書館協会、2013年）を使用した。この教科書は近現代史の比重が全体の半分ほどであり、筆者の指導方針と合致しているため長年採用している。近現代の比重が多いとはいえ、前近代の

ものも含め幅広くも比較的深い内容が記述されている点でも良書といえる。一つ難点を挙げれば、章にあたる UNIT が 25 となっており、15 回の授業にどのように充当するか未だに苦心している。

こうした経緯をふまえ 2017 年度は、学部の授業は教科書に千錫烈編著『ベーシック司書講座・図書館の基礎と展望 10 図書・図書館史』（学文社、2014 年）を使用した。同書は 15 章となっており、授業の構成がしやすい。またヨーロッパの図書館について、多くはないが現代の状況にも言及されている点から採用した。実際の授業では、小黒前掲書も参考資料として挙げ、同書の記述にも触れるなどして補完した部分もある。

図書・図書館史において、図書史と図書館史をどう配分するかも教員にとっては楽しくも悩ましいところである。オーソドックスな歴史の叙述方法として、年代順に語る編年体と人物などのテーマで語る紀伝体がある。いわゆる高等学校などの「教科書的」といわれる記述は編年体である。歴史学を深めていくとそれぞれの良さというものが見えてくるが、図書・図書館史を受講する学生の大半が歴史学を専門としないことを鑑みるとやはり編年体がまず理解しやすいのではないかと考える。したがって、小黒前掲書ではメディア史と図書館史が分かれているが、筆者はそれぞれについてなるべく同年代となるようメディア史と図書館史を交互に配した。また、世界史的視点を身につけてもらうべく、地域が異なっても同年代のできごとを同じ時間内で話すことができるように授業計画を構成した。

## 2. 前提としての「歴史とは何か」

前述の通り、本科目において受講者の大半は歴史学を専門としていないことが想定される。筆者は、共通教育科目における歴史学の入門講座においては 1 年生の受講が想定されるため、「大学における学びとは何か」という内容を初回に、「歴史とは何か」を第 2 回に充当したが<sup>4</sup>、本学の図書・図書館史においては時間の制約と履修年次が 1 年生ではないこと（学部は 3・4 年生、短大は 2 年生）から、初回の授業において「歴史とは何か」という内容を話すことにしている<sup>5</sup>。

その前提として、大学における学習の大きな特徴として主体的な学びが挙げられ、教員の話も一度受け止めることを前提とした上で、やや疑ってみるぐらいの姿勢で聴いて欲しいと冒頭で話すことにしている。そして、学問としての歴史学へと話題を発展させる。特に強調するのは、高等学校までの歴史科目と大学における歴史学の違いについてである。

こちらも 2 年生以上にはやや易しい内容であるが、若い学生が 20 年ほど生きてきたなかで思い浮かべる歴史学習のイメージを発話させる。やや誘導的にはなってしまうが、高校までの歴史科目の印象を述べてもらい、「歴史＝暗記」のイメージがないかを探り、そう思っているという発言を拾う。そこで、年号や事象を暗記することにどのぐらいの意味があるかということも問いかける。似たような事例として、ピアノなど楽器演奏における暗譜（譜面の暗記）を引き合いに出す。筆者のように歴史学を専攻するのであれば覚えていなければならないが、そうでない一般の人びとにとっては必ずしも暗記は必要でないと考えてもいいのではないかと、といったことを述べる。そして、歴史学とは「なぜその事象が起きたのか」を検証するものであるという大枠を提示し、少し深めて解説を行っている。

歴史(学)とは何かというテーマの解説にあたっては、歴史を作るものは何か(=人がつくる)、人はなぜ歴史を作るのか、歴史における「原因」と「結果」、歴史は科学たりうるか、の4つについて述べることにしている。1つめの「歴史を作るものは何か」については、唐突だがイヌやネコに歴史はあるかと発話し、人間から見た生物学的なイヌ・ネコの歴史は可能だが、彼・彼女らに歴史(過去)は認識できないことが推察されるので、人間特有の営みであることを認識させる。キーワードは、「歴史を作る主体は『人』」である。

2つめの「人はなぜ歴史を作るのか」というテーマは、やや哲学的である。筆者が学生時代、学部で史学概論を学んだとき、担当の教授は「人は『全(まった)きもの(=神)』に近づくべく動き、その跡が歴史である」と解説され、大変感激したことを覚えている。しかしながら現在の学生にこの表現はやや難解であると考えられたので、本意を損ねない程度に平易な言い方を考えた。ここでも唐突であるが、受講者に対して「いま、もしくは、これから、何がしたいか」を発話する。そうすると、午前中の授業ではおなかがすいているので何か食べたいとか、寝たいとか(筆者の授業がつまらないのかもしれない…)、資格を取りたい、スポーツをしたい、旅行に行きたいなどさまざまな答えが返ってきて、好感触である。こうした「○○をしたい」ということ(欲求)ができたとき(解消)、どのような感情になるか、やさしい言い方をすれば「満足」となる。この「満足」を突き詰めていくとどうなるか。人が日々生きるのはいくら小さなものでも「満足」を積み重ねるためである。それらの積み重ねは最終的に「幸福(感)」となるのではなかろうか。つまり、人は幸せを求めて生きている、といえる。このように、人は幸せを求めて動く存在であり、その動いた跡が「歴史」であるということができよう。「歴史」を捉える大前提として、歴史の教科書は政治史や文化史がメインであるためあまり身近に感じられないものかもしれないが、歴史の本質はわれわれの生活と決して縁遠いものではない、むしろ切っても切れないものであるという認識をしてもらうため、このような事例を挙げることにしている。

3つめの「歴史における『原因』と『結果』」であるが、これもあまり難しい話には立ち入らない。歴史とは「何が起きる」現象、何が起きた「結果」であるが、この歴史という「結果」が起きるには必ず原因があり、この原因と結果の関係を「因果関係」ということをまず説明する。因果関係という言葉は一般的に認知されているため学生にも比較的すんなりと入っていくと考えられるが、この言葉だけだと誤解が生じる恐れがある。したがって、因果関係という言葉だけからだと、1つの原因から必ず同じ結果が現れる(単一原因論)ともとれるが、実際にはそうではなく、ものごとにはいくつもの要因が絡まっており、1つの原因から必ず同じ結果が現れるわけではない(複合原因論)であることを加えている。

そして最後にやや難解ではあるが、歴史学は科学たり得るか、ということに少し触れている。歴史学は学問体系として成立しているものであるが、その理論はどのようなものか。学問は科学であるが、学問としての科学が成立するには客観性が担保されている必要である。客観性とは、誰がやっても同じ結果になる、ということであると言い換えることができる。このために何を行うかを学生に問うと、こちらが想定する「実験で証明する」という答えが返ってくる。この実験を、果たして歴史で行うことができるであろうか。いうまでもなく、歴史は実験で証明することがで

きない。歴史のできごとを確認するいちばん確実な方法は、タイムマシンに乗って実際に観に行くことができればよいのであるが、管見では残念ながら2017年現在で実用化されたとはきいていない。また、歴史上のできごとを再現しようとしても、そのときに生きていた人を生き返らせることもできないし、環境や人物を揃えて映画のカチンコを鳴らして再現スタート、というわけにもいかない。非常にプリミティブだが、このように歴史は実験ができないという点で、他の(特に自然科学系の)学問と決定的な違いがあるのである(ある意味「欠点」であるかもしれない)。

では、実験を行うことのできない歴史は、科学としての学問として成立しえないのであろうか。歴史学は古代から存在しているという意味でもこの間の答えは否であり、学問体系として確立されているのであるが、その理論としては「反証可能性」を保証することで科学として成立している。反証可能性(falsifiability)とは、誰でもが反証を挙げてそれを論破しうる可能性のことである。その内容は細かくあり<sup>6</sup>、それはパワーポイントのスライドには掲示するが、一般教養レベルでは覚える必要はないと述べるにとどめている。

なお、筆者が学部時代の史学概論でもう一つ感銘を受けたのが、歴史を作る主体としての人は過ちも犯すので、歴史には進歩もあれば退歩もある、と教授が仰っていたことである。このことは昨今の世界各国の政治を見ていると、身につまされるものがある。

やや哲学にも近い内容を初回に行っているので、学生にとってはやや難解であると想像される。しかしながら重要な内容であるので、なるべく平易な表現になるよう努めながら、毎年欠かさず初回の授業で行うことにしている。

### 3. メディア史としての図書史における博物館資料・展示活用を考える

#### (1) 記録メディアの歴史の概略—図書以前を中心に—

「歴史とは何か」という話題がやや長くなってしまったが、ここから本題の記録メディア史に入る。まず、本稿において主題とするのはメディアの中でも図書以前の「モノ」である。その図書以前の「図書」の流れについて、教科書<sup>7</sup>に基づきながら簡単に触れたい。

図書資料はベースが紙であるが、紙以前の記録メディアとしては、大きく分けて6種類のメディアを経てきたと考えることができる。甲骨、石板、粘土板、パピルス、パーチメント(羊皮紙)、竹簡・木簡がそれである。甲骨は古代殷王朝(紀元前16世紀～紀元前11世紀)期に亀の甲羅や獣骨を用いた占いから発生した記録メディアで、漢字の原形となった甲骨文字でも知られている。石板は石に刻んだ記録(古代中国をはじめ世界各地)、粘土に刻んだ粘土板(主に古代メソポタミア、紀元前3000年頃から紀元直後まで)など厚いものが続き、パピルス草を使ったパピルス(古代エジプト発祥、紀元前3500年前頃から紀元後1000年頃まで)のあたりから薄いものとなる。パピルスに続く薄いメディアとしては、羊や山羊の皮をなめして作るパーチメント(羊皮紙。紀元前2世紀頃から紀元後15世紀頃まで)、竹や木を用いた竹簡・木簡(古代中国発祥で紀元前1000年頃から。日本では8世紀頃まで)が生まれた。いずれもこの順番で移り変わったものではなく、併存していたものや伝播の状況により特定のメディアは使われなかった地域もあることなどにも触れ、世界史的に認識してもらえるように努めている。

筆者が専門としてきた日本近現代史、とりわけ政治史において、基礎となる史料は19世紀後半以降の文字史料である。第二次世界大戦後、日本における歴史学研究もマルクス主義的な歴史学の影響を受けていたが、1980年代以降は実証主義的な手法が用いられ、現在は定着している。昭和初期、とりわけ戦時中の政治動向を研究するにあたって、当事者の日記を史料として活用したり、当事者への聞き取り（オーラルヒストリー）を行ったりするなど行われてきたが、活字化されているものも多く、使用する史料は活字が多い。一方、歴史学全体で考えると、扱う時代は全時代であり、文字が生まれてからは文献史学であるが、それ以前は考古学に分類することができ、史料は遺物（考古資料）である。また文献史学であっても、大量印刷技術が開花する以前は印刷物でも現存するものは多くないため、現在の博物館資料に相当するものも少なくない。

歴史学研究は根拠が史料であるため、歴史学での研究方法を理解してもらうには史料が欠かせない。授業でも史料を提示することは、ただテキストを解説するよりはるかに理解度は高まるといえよう（百聞は一見にしかず）。しかしながら前述のように、図書・図書館史で取り上げられている史料には貴重な博物館資料も多く、学生に現物を手にとってもらいたいが、現実問題として難しい。そこで活用できるのがレプリカである。レプリカは、現物の複製品であるためややネガティブなイメージで語られることもないとはいえないようだが<sup>8</sup>、モノを説明するにあたって活字よりは写真、写真よりはレプリカと、その教育効果は少なくない。そこで、本科目においてはいくつかのレプリカを学生に触れてもらうことにしている。以下、いくつか挙げておきたい。

## (2) 本学図書館学課程研究室で所有しているレプリカ

本学図書館学研究室では、本科目の前任である故・小林卓准教授を中心に先生方が本科目をはじめ図書館学課程の授業で使用するために揃えた各時代のメディア資料のレプリカをいくつか所有している。主だったものとしては次のようなものがある。

まず、メディア史の冒頭で出てくる甲骨であるが、このレプリカがある。教科書等ではやや小振りなものの写真などもよく見られるが<sup>9</sup>、当研究室で所有しているものは亀甲（所有のものは亀の腹の部分）をほぼそのまま使ったもののレプリカであり、20cm強の比較的大振りのものである。これには漢字に近い多くの甲骨文字も刻まれており、漢字の原形であると説明するのにもわかりやすく、大変重宝している。

次に、石板である。石に文字を刻んだ石板は大小さまざまなものがあるが、石碑や墓石などで現在でもよく見られるという例示<sup>10</sup>からすると、それほどなじみのないものでもない。しかしながら教科書の説明にもあるように、それを現在の紙のようなメディアと比較すれば当然手軽に記録できるものでないことは想像できる。有名な石板として、ロゼッタストーンが挙げられることも多いと思われる<sup>11</sup>。これは、紀元前196年のエジプト王戴冠式の知らせがヒエログリフ（聖刻文字）とデモティック（民衆文字）とギリシャ文字で刻まれたものであるが、当研究室ではこのロゼッタストーンのレプリカを所有している。現物は巨大なものなのでこれを忠実に再現したというよりは、いわゆるお土産品としてA4判に収まる程度に石を模して文を印刷したものである。しかしながら、なかなか重く作られており、重量感という意味でも触れてもらうことには少

なからず意味があると考えられる。

粘土板は後述することとして、パピルスに移る。パピルスは paper の語源となっていることから名前そのものは知っている学生も少なくないが、紙と製法が異なること<sup>12</sup>は意外と知られていないようなので、モノに触れてもらうことは重要である。パピルスのレプリカは博物館でのお土産品である。もちろん、史料としては当時のモノに触れられればそれに越したことはないが、それらは貴重な考古史料で博物館資料となって実際に触れることは難しい。レプリカは現在作られたものではあるが、当時の資料に近い作り方をされているものであれば、それをモノとして触れてみることは有益である。

パーチメントは日本語では羊皮紙といわれ、その名の通り羊や山羊の皮をなめしてそこに文字などを書く。出所は不明だが、当研究室所有のレプリカはこの羊皮紙に質感をよく似せたものがある。筆者は2017年に実際の羊皮紙（山羊の皮を使用）を購入したので、今後はこれも授業で見せる予定である。筆者はこれをアンティークショップで購入したが、実際に紙として使用するのためのさらのもので、A4判で1枚5000円ほどであった。質感はいわゆる革製品の柔らかい印象ではなく、やや堅い感じのものであった。

木簡・竹簡は、木や竹を板状にしたものに筆書きをする。日本通史の中で木簡は古代の律令制国家の頃に税となる品を中央政府に送るための伝票として使われ、高校の日本史の教科書にも記述があるため一般的にも知られていると考えられる。したがって、高校までの日本史の知識の延長としてはレプリカも古代のものがよいと思われる。その意味では残念ながら当研究室所有のものは当該期のものではなく、また史料を忠実に再現したものというよりはやや記念品に近いものではあるが、木簡がどのような雰囲気のものであったかということを知るだけでも教育的効果は相当高いと考え、活用している。

以上、紙以前のメディアについて、当研究室所有のレプリカとその活用について紹介した。レプリカについては最後に、その他それ以降のものについても若干触れておきたい。その他のものには百万塔陀羅尼、各種の糸綴じ本がある。百万塔陀羅尼は764年から770年にかけて称徳天皇の発願により作られたもので、小木塔100万基に印刷した4種類の陀羅尼経を納めたもので、現存するものとしては世界最古の印刷物である。百万塔陀羅尼はモノとしては、陀羅尼経本体とそれを納める百万塔で構成されている。当研究室所蔵のものはこの百万塔と、陀羅尼経4種類のレプリカである。いずれも現代の材料・製法で再現されたものではあるが、レプリカでも触ってある程度の感覚を得ることは重要である。

そして糸綴じ本であるが、これは実際にメモ帳として使えるようにお土産品としてミュージアムショップで販売されていたものようである。筆者はこれらの形態についてあまり詳しくないこともあり、授業では回して学生に手にとってもらう程度しかしていないが、もう少し活用できればと思っている。

このように、小林准教授をはじめ各先生方が揃えられたレプリカにより、かなり感触として確かめる授業を行うことが可能になっている。もちろん、これですべてをカバーできているわけではなく、今後もこうした資料は充実させる必要がある。だが、レプリカ類は高価なものも多く、

すぐに購入するのは難しい状況である。

レプリカがない場合の資料提示としては、視聴覚資料が効果的であることは言うまでもない。歴史学は本質が歴史の「語り」や検証にあることから、科目によってはパワーポイントなどの視聴覚提示装置を用いなくても授業は可能である。しかしながら、それには教員側にも熟練した技能が求められ、また本科目も含め、歴史学を専門としない人びとにとっては、画面のない講師の講演はときに凡庸に退屈に感じられることもある。近年はコンピュータの急激な普及により、ひと昔前とは違って画像・映像の提示が大変容易になったので、視聴覚提示装置を用いない手はない。

冒頭でも述べたように、歴史を学ぶ上では史料現物に触れるのがいちばんである。レプリカもそれら現物があるものである。現物が収められた博物館・美術館（以下、「博物館等」）に行くのがいちばんよいわけであるが、毎回校外学習というわけにもいかない。そこで、教科書で触れられている史料について、現物等を収蔵している博物館等に筆者が足を運び、写真撮影が可能であるものについては撮影を行い、その画像をパワーポイントで提示することも、活字のみよりはるかに学習効果が高いと考えた。2017年度は、古い記録メディアを収蔵する博物館等をいくつか観覧したので、次にその博物館資料やレプリカ等の展示状況とそれら授業への活用を考えたい。

### (3) 博物館展示—古代オリエント博物館・印刷博物館・紙の博物館—

2017年度の授業にあたっては他大学の共通教育科目とのかねあいも含め、前期中に比較的多く博物館に足を運んだ。その中で特に本科目の内容と深い関係があるモノを収蔵しているところとして考えられたのが、古代オリエント博物館と印刷博物館、紙の博物館である。いずれも多く資料を収蔵しておりすべてに触れることはできないので、本科目の内容と筆者の興味関心からという限られた部分ではあるが、展示等の状況と授業への活用方を考えたい。

古代オリエント博物館は東京・池袋のサンシャインシティ文化会館7階にある古代オリエントに関する資料を主に展示している博物館である。同館を運営する財団法人古代オリエント博物館が1977年に設立され、翌年に開館している<sup>13</sup>。その名の通り収蔵資料は幅広く、西アジア・エジプト地域を中心に、旧石器時代からササン朝期（7世紀半ば頃）までの資料やシリアの出土品など約5000点に及ぶ。ビルのワンフロアのため展示スペース全体は大変広いというわけではないものの、展示資料はかなり多く、古代オリエントに関するものはどのようなかたちのものでもあらゆるものを収集するという心意気が感じられた。

古代オリエントにおけるメディアで普及していたのは粘土板である。筆者が来館したときの常設展でも、粘土板は展示されていた。1点ではなかったが、古代オリエントの全体像を知ってもらうことを目的とする常設展の性格上、それだけを多く展示することはやはり難しいであろう。その幅広さは、筆者のようにピンポイントに特定のモノを観たいという人間には残念ながら「観たいモノが少ない」という印象を与えてしまうが、それが館の瑕疵でないことは言うまでもないので、その点は企画展等に期待したいところである。



博物館等への来館時、ミュージアムショップがどの程度充実しているか観ることも楽しみの一つである。加えて、その博物館等が独自に常設展を解説した図録や収蔵品目録がある場合、なるべく購入することにしている。古代オリエント博物館では、筆者の来館時は残念ながら独自の図録は販売されていなかったが、研究者による古代オリエントに関する入門的な概説書と、粘土板のレプリカを購入した。粘土板のレプリカはあまり大きくないものだったので、2017年度は他大学の共通教育科目が240人教室の授業で、そちらでも使えるように2個購入できればと考えていた。しかしながら、販売されていた粘土板のレプリカが2000円弱で、1個としてはそれほど高くないものの、やはり2個で3000円を超えてしまうとなかなか経済的に厳しかったため、今回は1個の購入とした。

次に、印刷博物館を挙げておきたい。世界史上において印刷技術の果たした役割は大きく、特に活版印刷の発明はあらゆる分野に大きな革命を起こした。印刷博物館は、そうした印刷の役割や意義を伝えることを目的とした博物館である<sup>14</sup>。凸版印刷株式会社が運営しており、東京・小石川のTOPPAN小石川ビルに入っている。書籍をはじめポスターやチラシといったものまで、さまざまな印刷物を収蔵資料としている。本科目との関係する資料だけでも、百万塔陀羅尼、駿河版銅活字、ゼネフェルダ<sup>15</sup>『石版印刷の手引き』、オフセット印刷機など数多い。展示資料はどれも興味深く、魅力的なものであった。

こちらミュージアムショップで館独自の概説書やレプリカを探した。特に、活字そのものもしくはレプリカがあればと思ったが、いずれもないようだった（その後、金属活字はアンティークショップで買い求めた）。さらなる充実を期待したい。

そして、紙の博物館である。紙の博物館は、紙に関する資料を幅広く収集する博物館である。日本の敗戦後、分割された王子製紙の紙業資料室を公開する形で1950年に「製紙記念館」として設立されたのが始まりで、1953年に財団法人製紙博物館、1965年に紙の博物館と改称し、1998年に現在の飛鳥山公園に新装開館した<sup>16</sup>。博物館スペースとして4階分のフロアがあり、1階が講演ホールおよび図書室、2階から4階が展示スペースとなっている。2階の入口から入って最初の展示スペースは、現代の製紙技術の紹介となっており、このようなもので製紙業に入るのかという新しい発見もあっておもしろい。3階は紙ができるまでの様子を体験しながら学べる教育的な展示となっており、4階が紙の歴史および企画展示スペースとなっている。この4階の歴史展示スペースが秀逸で、決して広くはないものの、図書史として紙以前のものから近代までの広く・浅くを適切な資料と展示で網羅している印象を受けた。紙の博物館は特記ない限り展示資料の写真撮影が可能とのことで、筆者も多くの資料を写真に納めた。

紙の博物館のミュージアムショップは、こちら幅広くはないものの企画展図録や紀要、紙に関する入門書や研究書、メモ帳などのお土産などが多数取り揃えられていたのも評価できる。さすがに紙以前のメディアに関するレプリカ等は販売されていないようであったが、パピルスは販売されていたので買い求めた。このパピルスの持ち帰り時に折れないように段ボール紙を添えてくださるなど、受付の方の細かい気配りにも感激した。

以上、簡単ではあるが、本科目で取り扱うメディアに関係した資料を収蔵する博物館等の資料

状況について述べた。この他にも東京大学総合研究博物館インターメディアテック、国立科学博物館、放送博物館（NHK）なども訪れたが、それについてはまたの機会としたい。今回巡った館のいくつかは資料の撮影が禁止であったため、残念ながら全体としては筆者が撮影した博物館資料の画像を授業内で提示することがあまりできなかった。また、キャプションがデジタル機器になっており操作しないと解説をみるできない資料や、学芸員・解説員による解説は団体のみにしか対応していない館などもあった。こうした状況は一來館者の立場からすると決して親切な展示とはいえ、正直なところ授業でも学生に対し来館を勧めにくい。他方、校外授業として1コマ程度は、体験コーナーなども含め団体観覧を組み込んでもいいのかもしれないと、授業計画を見直すきっかけともなった。

#### 4. その他—映像作品の活用—

最後に、視聴覚に訴えるという文脈から映像作品の活用について触れておきたい。一般の映像作品も活用できるものが少なからずあるが、それについては他日に期すこととし、ここでは基本資料ともいうべきものを挙げておく。それは、『映像でみる戦後日本図書館のあゆみ—『格子なき図書館』と『図書館とこどもたち』—』（日本図書館協会、2014年）である。この作品を「図書・図書館史」で活用されている先生はすでに多いのではないだろうか。この映像作品そのものについては、同DVD付属の詳細な解説をご参照いただきたいが、『格子なき図書館』は1950年に制作されたいわゆるCIE映画で、同年施行の図書館法における図書館奉仕の活動が描かれている（22分）<sup>17</sup>。『図書館とこどもたち—ある市立図書館の自動奉仕—』は1979年に制作され、初期の日野市立図書館の様子が児童サービスを中心に記録されている（30分）。

この2本の作品の間には、約30年の時間が流れている。したがって筆者は本科目初年度担当当初、2コマを充当してそれぞれ1コマ1本ずつ視聴をする予定であった。しかし実際には時間配分の関係で、1コマ内で2本とも観ることとなってしまった。筆者としては解説が足りなくなってしまって理解が不足してしまうのではないかと危惧していたのであるが、学生に書かせたコメントの中に30年での進歩がよくわかったというものがあり、2本を続けてみることもかなり効果があることが判明した。筆者自身による解説としては（実際には同DVD付属解説の受け売りではあるが）、『図書館とこどもたち』ではすでに貸出でバーコード方式が採用されているが、それ以前のブラウン方式によって貸出が簡便になり貸出冊数が増加したことなどを伝えている。その際も、なるべく実際のブラウン方式の図書館用品を用意し、学生に触れてもらうことにしている。この2本の映像作品は、現在われわれが利用者として享受している図書館サービスが決して自明のものではなく、その時代時代の図書館人が試行錯誤を重ねた上に成立していることを雄弁に語ってくれている。

作品に関連して、日本近現代史を専攻した者として『格子なき図書館』の印象的なシーンを一つ挙げておきたい。それは、目録の引き方を解説したシーンである。同映画で、書名目録、著者目録、件名目録の引き方が示されているが、そこで例に挙げられている本が、美濃部達吉『日本国憲法原論』（有斐閣、1949年）であったことが象徴的である。ここで日本国憲法をテーマとし

た本を例として採用したことに、GHQ 側にも図書館界にも日本国憲法が思想の自由の根本であるという認識が表れていると筆者には感じ取れるのである。

最後になるが、『映像でみる戦後日本図書館のあゆみ』の DVD 化にあたっては、小林卓准教授も多大な尽力をされた。本科目において小林准教授の後任である筆者は、この作品は毎年必ず学生に視聴してもらうことにしている。この作品を通して、小林准教授の考えた図書・図書館史が少しでも学生に伝われば本望であると考えている。

## おわりに

本稿では、図書・図書館史料における博物館資料・展示の活用可能性を考察した。歴史科目は暗記中心なのではないかというところから出発し、活字だけでなく視聴覚資料活用の効果を期待し、博物館資料等の提示による効用を考察した。学生からのコメントカードを見ても、レプリカ等の使用は教員による口頭での説明だけよりはるかに理解度が上がると感じている。レプリカでもそうなのであるから、現物資料はさらなる効用があると考えられる。

一方、博物館資料そのものの「活用」はハードルが高い。非常に大雑把な言い方をすれば、図書館資料と博物館資料のいちばん大きな違いは、博物館資料が一点ものであるということにある。その観点に立つと、博物館資料を後世の人々に活用してもらうためには保存が不可欠であるが、それを前面に打ち出すと、現代の人びとがそれらを活用することができないというジレンマを抱えている。しかしながら、博物館資料も一部の研究者のための閉ざされた資料であってはならないだろう。

図書館司書は、利用者と図書館資料を結びつける人的資源である。図書館も機能・有機体として考えれば、利用者と図書館資料を結びつける媒体（メディア）であるといえる。これは、博物館等でも同じなのではないだろうか。利用者と博物館資料を結びつける人的資源が学芸員であり、博物館自体はメディアである。メディアはコミュニケーション・ツールであることを考えると、図書館も博物館等もコミュニケーション・ツールといえよう。最近では「ミュージアムコミュニケーション」として、「来館者」という狭いくくりを超えた概念も登場しているようである<sup>18</sup>。これは、博物館等をメディアそのものとして捉えているように思われる。であるとすれば、博物館資料の活用の仕方ともこれまでの方法と変わる部分も出てきて、保存と両立させながら今まで以上の活用が可能になるように思われる。

歴史学は非常におもしろい学問領域で、ある意味いろいろな分野に「首を突っ込む」ことが可能である。図書館も、あらゆる分野を対象とするという意味で似ている。現在、図書館や博物館等に限ったことではないが、今までのやり方では通用しない時代に入ってきている。2017 年度の授業にあたって博物館等に足を運び博物館資料を観て、それらにはさまざまな可能性が秘められていると感じた。図書館も博物館等もこれまでの概念に囚われず、外へ飛び出していくことが必要である。本稿で取り上げた博物館資料が本科目に有益であることは本論で明らかにしたが、加えてこうした状況は博物館等にも何らかのプラスとなる作用があるかもしれない。本稿での考察を踏まえ、本科目の充実を図るとともに、博物館等への働きかけも行っていきたい。

注

- 1 本科目については、必修どころか選択科目としても不要であるという議論が過去に出ているのが実状である。1996年改定の図書館法施行規則における司書講習科目の見直し論議の中で、「暗記科目であって現場ではほとんど意味がない」という意見があったという(小黒浩司「はじめに」、同編著『JLA 図書館情報学テキストシリーズ12 図書及び図書館史』、日本図書館協会、2000年、4-5ページ。なお、当時の科目名は「図書及び図書館史」)。本論中で述べるとおり、それは本科目に限らず、特に筆者のように歴史学を専攻した者からすると暗記科目でないことは明らかではあるが、20世紀末の段階では歴史科目が暗記中心であったことも否めない。2000年代に入り、歴史を学ぶおもしろさが多少は一般にも認知されてきたと考えているが、こうした「歴史=暗記」のイメージを払拭することも筆者の重要な役割であると認識し、授業を担当している。
- 2 筆者の体験からの私見ではあるが、2000年頃を境に急速にインターネットが普及し、それに伴い、デジタルメディアも急激に普及したと考える。したがって、2000年頃の「図書及び図書館史」の教科書では、デジタルメディアに関する記述はないものが一般的だったといえる(例えば、北嶋武彦編著『新現代図書館学講座13 図書及び図書館史』、東京書籍、1998年)。小黒前掲書(2000)では、少ないながらも「記録メディアの発展」としてCD-ROMとしてJ-BISCの写真が掲載されていたり、ネットワーク情報に関する記述がなされたりするなど、当時としては数少ない同時代のニューメディアを取り上げていたものであると考えられる(「UNIT-4 記録メディアの歴史 記録メディアの発展(3)」、小黒前掲書、24~27ページ)。
- 3 講義概要2017(文学部図書館学課程 [https://www.jissen.ac.jp/life/lesson\\_and\\_unit/u92b6g0000001fdt-att/15\\_2017\\_s\\_dai\\_tosyo.pdf](https://www.jissen.ac.jp/life/lesson_and_unit/u92b6g0000001fdt-att/15_2017_s_dai_tosyo.pdf) および短期大学部図書館学課程 [https://www.jissen.ac.jp/life/lesson\\_and\\_unit/u92b6g0000001fdt-att/23\\_2017\\_s\\_tan\\_tosyo.pdf](https://www.jissen.ac.jp/life/lesson_and_unit/u92b6g0000001fdt-att/23_2017_s_tan_tosyo.pdf))。以下、インターネット情報の最終閲覧日はいずれも2017年10月8日。
- 4 2017年度は日本大学文理学部にて、共通教育科目「歴史と社会1」を担当した(シラバスは、<https://syllabus.chs.nihon-u.ac.jp/op/syllabus50964.html>)。
- 5 このテーマについては、小田中直樹『歴史学って何だ?』(PHP研究所、2004年)、塚塚忠躬『史学概論』(東京大学出版会、2010年)などを参照した。なお、筆者は学部時代、澤田昭夫教授の「史学概論」と塚塚教授の「西洋史入門」を履修した。
- 6 概要としては、塚塚、前掲書、1~13ページを参照。
- 7 小黒浩司編著『JLA 図書館情報学テキストシリーズⅢ -11 図書・図書館史』(日本図書館協会、2013年)。
- 8 たとえば「一般にレプリカは原品の代替品としてネガティブにとらえられがちですが、〔中略〕来館者にとって見やすい展示環境を整えることができたり、「原品を博物館が所有しない場合には、展示ストーリーに合わせて体系的な展示を構成することもできる、など(黒沢浩『博物館展示論—学芸員の現場で役立つ基礎と実践—』、講談社、2014年、89ページ)。同書の記述は博物館展示の側面から述べられているが(博物館側からしてみれば、資料保存にも有益)、これは同時に教育効果が発生しているといえる。
- 9 小黒、前掲書、12ページ。
- 10 小黒、前掲書、13ページ。
- 11 同上。
- 12 パピルス草の茎を刃物で薄く切り広げ、重ね合わせて作られる。
- 13 古代オリエント博物館の概要については、同館ホームページ「当博物館について」(<http://aom-tokyo.com/about/index.html>)を参照した。同財団は、現在は公益財団法人。
- 14 印刷博物館については、印刷博物館ホームページ「印刷博物館へようこそ」(<http://www.printing-museum.org/objective/index.html>)を参照した。
- 15 印刷博物館の表記では「セネフェルダー」となっている(<http://www.printing-museum.org/collection/looking/detail.html?mode=detail&number=21247&year=1818>)。
- 16 以上、紙の博物館の概要については、同館「紙の博物館について」(<http://www.papermuseum.jp/about/>)を参照。同財団は、現在は公益財団法人。
- 17 詳細は同DVD付属の『映像でみる戦後日本図書館のあゆみ 解説』(日本図書館協会、2014年)を参照。CIE = 民間情報教育局(Civil Information and Education Section): 敗戦後日本を占領統治した連合国(軍)最高司令官総司令部(GHQ/SCAP: General Headquarters/Supreme Commander for Allied Powers)の部局の一つで、教育関係などを統括した。
- 18 たとえば、光岡寿郎『変貌するミュージアムコミュニケーション—来館者と展示空間をめぐるメディア論的想像力—』(せりか書房、2017年)。